

別冊付録&巻頭はレンズ大特集 / ニコンD7500デビュー! / セルフポートレートの世界



5 MAY 2017

特集

[単焦点&ズーム]

# 標準レンズの描写力

標準レンズ30本を  
実写比較テスト!  
最高性能を引き出す  
“オイシイ絞り”が  
わかる

ズバリ判定!

いつも使うレンズだから、  
本当の性能を知りたい!

連写秒8コマに進化!  
やっぱり“一眼レフ”は  
こうでなくちゃ!

新型ミドル機  
「**ニコンD7500**」  
デビュー!



別冊付録  
撮影ジャンル別  
極上レンズ  
セレクション

プロから学ぶ“自撮り”の奥義  
奥深き  
セルフポートレートの世界

想像をはるかに上回るクオリティ!  
スゴイぞ!  
本格コスプレ写真

寄って迫って春色あふれる  
世界にクローズアップ!  
春の「花マクロ」は  
カラフルに!

キャノンEOS M6で  
スナップショット  
立木義浩「桜」  
スナップ

30年の発展史とこれから目指すもの  
キャノン「EOS」開発秘話

カードやPCのトラブルに備えて  
「消えた写真」の  
復旧方法アリマス

新型レンズ実写レポート

キャノン  
EF-S35ミリF2.8マクロIS  
シグマ  
100~400ミリF5-6.3DG  
ルミックス・ライカ  
DG8~18ミリF2.8-4

# 写真家

ルにした写真が数多く雑誌や広告に使われることになる。  
「ありふれた風景も角度や時間で輝きを見せる」「写真の前に人生がある」「撮ることは去りゆく時間とのむなししい戦いだ」など、含蓄のある言葉がそこに放たれる。  
後年、巨匠と敬され



©2016 Day For Productions/ARTE France/INA  
©Keller Robert Doisneau

たことで不遇の時期もあったそうだ。この映画を観て、ドアノの写真を見直すと、また違う滋味が感じられるはずだ。なお現在、オリジナルプリント約40点を展示する写真展「ドアノのバリ劇場」が写大ギャラリーで開催中。こちらは6月11日まで。

## 写真家・新倉孝雄氏が東京・町田市で講演会「コンボラ写真とは何か」を考える



新倉さんは1939年、東京都生まれ。

コンボラ写真は60年代に登場した新しい写真の潮流だ。その重要な写真家のひとりである新倉孝雄氏が、その時代と写真を語る「あのころの写真で、町田の街ーまちだワンダフルストーリー」が開かれる。5月18日14〜16時で、会場は町田市民文学館こぼ

らんど(☎042・745・7608)2階大会議室。参加費は一般300円。

当時は写真表現が熱く語られた。現実を写すストレートな写真に異を唱えるアレ、ブルの表現が巻き起こり、そこに「コンボラ写真」も登場した。ただ、この写真は当初、あまり理解されず、批判的に見る写真家も少なくなかったよう

だ。何気ない日常を切り取った写真に、多くの人は何を読み取ればいいのか戸惑った。その代表的な写真家は関口正夫

牛腸茂雄をはじめ、稲越功一や田村彰英らの一時期の写真も含まれる。

新倉氏は70年代、そして21世紀初頭に気になる街として町田駅周辺を歩き、撮影してきた。そこで撮影された写真70点ほどを紹介しながら、自らの写真への対し方、想いを語る。その写真はドキュメンタリーでも、表現でもなく視

確認だという。コンボラ写真とは何か。当時を知る人も知らない人にも興味深い講演になりそう。開催の詳細等は、まちだ雑学大学のサイト(<http://ezatsudai.web.fc2.com/>)ま

## 第40回キヤノン「写真新世紀」公募開始 新審査員加え7名が作品選考

キヤノン「写真新世紀」2017年度(第40回公募)の応募受付が始まった。参加希望者は、まずウェブでの登録が必要で、6月8日23時59分まで行なわれる。

写真新世紀は新人写真家の登龍門として毎年行なわれている。レギュラー審査員に加

え、毎年、新たな審査員が参加している。今年はいンドを拠点に活動するアーティストのダヤニータ・シン氏、サンフランシスコMOMAキュレーターのサンドラ・フィリッ

プ氏ら計7名が担当。入賞作品展の「写真新世紀東京展」では公開審査会のは

か、佳作、優秀賞受賞者によるアーティスト・トークを行なう。

作品の応募は6月15日(郵送は当日消印有効、オンラインは23時59分まで)。グランプリ1名には奨励金100万円とキヤノン製品が贈られる。写真新世紀東京展の開催は11月の予定。応募条件などの情報は公式サイト(<http://global.canon/ja/newcosmos/>)へ。

## 入院病棟でフォトスライドショーなどを開催

# 写真の可能性を広げるT.T.Tanakaさんの取り組み

### 旅行や写真展に足を運べない入院患者たちに見てほしい思い

「写真がもつと日常の中に入り込んでいいんじゃないか」——そう考えた写真家T.T.Tanakaさんだ。その手始めに病院でフォトスライドショーを行なうことにした。

本業の仕事で病院関係とつながりができた。緩和ケア病棟を作る中で、一室にライブラリーがあり、患者さんが写真集に見入る姿を目にした。

「昔、体育館で映画上映会があったり、移動図書館が来ましたよね。写真家が出張して作品を見せ、その写真について解説したら面白いんじゃないかと考えました」

そのアイデアを病院関係者に話すところからスタートさせた。重い病状の患者さんはベッドをナースステーション前に集めて、体調を見ながら20分ほど。長いときは2時間超のトークを展開する。

Tanakaさんは仕事柄、国内外で旅することが多く、その移動中に目にした光景が彼の被写体だ。



岡山の病院で講演するT.T.Tanakaさん。文字通り「移動写真展」だ。

1枚の写真は見る人それぞれの物語のきっかけになる。  
「意外だったのは、病院関係者の中で写真を高尚なアートと捉え、患者が楽しめるのかを懸念する声が多かったことです」

そこでイベントの前に開催地を訪ね、街を撮影した。  
「見慣れた場所が違って見える。街を再発見する楽しさを感じてもらえ、予想以上の反応でした」

病院職員に芸大作曲科出身者がいて、スライドショー中、即興でピアノ曲を奏でるといって楽しいハプニングも起きた。インターネットで多くの情報が気軽に手に入るようになったが、リアルの中で生まれる写真のポテンシャルを見逃してはならない。

そんなTanakaさんが自らの写真を探求し始めたのは10数年前からだ。若い人たちと勝負したいと思い、CAPPAの誌上コンテストへ毎月応募することを自らに課した。少なくない数の入賞作を集めて、昨年、写真集『ENCOUNTERS』を出版した。現在、アメリカの今をテーマに自作に取り組む。そう、写真はさまざまな出会いを引き寄せるメディアなのだ。Tanakaさんのホームページ(<https://encountersweb.com/>)も要チェック。



地元の高校写真部の生徒も集まり、即興の「写真クリニック」も始まるという。